

# 「学校」の枠を超えて、見えてくるものとは 民間との連携を探る

様々な学校教育のあり方のひとつとして少し前から注目を集めているのが、学校「外」との協力によって、学校が抱える課題の解決や新しい事業への取り組みをはかろうとする動きです。

今回は、現在どのような試みがなされようとしているか、2つの自治体の例を参考に、課題や展望について考えていきます。

取材・文 ● 甲斐ゆかり(サード・アイ)、金丸敦子 イラスト ● あきんこ



## 「外部の人たち」とは どんな立場を指すのか

公教育への民間の参入・連携と聞くと、塾などが授業に参入してくるような場面をイメージするかもしれません。教師という立場からは、それに対して若干の抵抗も感じてしまいがちです。

しかし、実際には、参入している「外部」は、塾に限りません。学校に関わっている外部の民間組織には、一般企業やNPO団体、地域住民など、多様なものがあります。また、学校との関わり方も、①補習授業の実施(塾)、②金融・ICT・メディア教育など専門分野の特別授業の開催(一般企業、NPO)、③校内のICT環境の整備と普及(一般企業)、④放課後の学童保育(NPO、地域住民)、⑤学校経営(民間経験者採用の校長、管理職)など、協力の形態や規模によって様々です。

## 民間との協力・連携が 生まれている背景

背景には、その自治体の抱える個々の事情があります。

例えば静岡県賀茂郡西伊豆町では、通信教育会社の教材を授業に導入しています。これは、人口減少や少子高齢化が進んで、学習指導を行う人材を確保することが難しく、都市部との学力格差が生じていることが課題となっているためです。奈良市では、市が運営する学童保育所で、塾のノウハウを取り入れた有料の学

習プログラムをスタートさせています。共働き世帯が増え、市外への通勤者が多く、子どもを安心して預けて働くことができる環境が求められたことが導入の理由に挙げられます。

福井県も奈良市と同様に共働き世帯が多いうえ、学習塾が少ないという特徴ももっています。そこで、民間企業が開発した、タブレット端末などで操作できる学習アプリの試験的な導入を開始。授業の復習や、アクティブ・ラーニングなど、個々のレベルに応じていつでも学習できる機会を提供することを目指しています。

このように、学校が民間と協力して行う取り組みは、地域の人口減少や高齢化、保護者の働き方の変化、子どもたちのライフスタイルの変化など、社会の変容にもなっており現れてきたと考えられます。

この他、校内の花壇の整備や図書館などでの読み聞かせ活動、学校近辺の清掃活動など、地域住民の協力もふくめると、学校は、多様な立場の人たちの多様な働きかけによって成り立っていることがわかります。



# 地域の実状に合わせた 様々な連携・協力が進みつつある



おはよう  
ございます



## マネジメントにおいて

### 民間出身の校長の採用

●2000年ごろを皮切りに、民間出身の校長の公募や採用が行われています。民間での経験と企画力、マネジメント力を学校経営に生かすことが求められているようです。



## 授業において

### 学校の授業で 塾講師が指導を行う



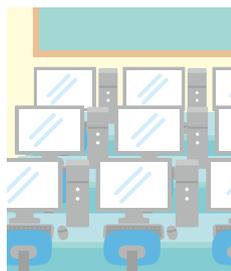
### 民間企業による 出張授業を行う

●塾講師の場合は、授業の補習や発展的な学習の指導、夏休み・冬休みなどの間の補習などが主な活動場面になります。民間企業では、金融やICT、メディアなど、企業の特性を生かした総合学習での出張授業や体験授業が多くあります。



## 設備面において

### 民間企業が 学校からの委託を受け、 IT設備を敷設する



### 学習用のアプリや タブレット等の 無償貸与を受ける

●ICT化が進む学校現場では、先進的な取り組みを行う学校へのインフラ・設備機器の貸与や、教師に向けた研修なども開催されています。



## 放課後において

### 民間で運営する 学童保育を利用する

●学童保育には、学校が主体で行うものと、民間の団体が運営するものがあり、料金体系や内容が異なってきます。民間の場合は、学習指導やスポーツ指導など、何らかの特色を打ち出す場合が多いようです。



## WORD

### 【公設民営学校】

公立学校の運営を民間に任せる形式を「公設民営学校」といいます。国家戦略特区諮問会議では、愛知県に2016年4月に開校する県立愛知総合工科高等学校の専攻科(2年制)の運営の民間委託を認定。地域での高度なモノづくりに関わる人材の育成・確保、産業競争力の強化を目指しています。



●お話をいただいたのは  
南房総市教育委員会  
教育長  
**三幣 貞夫** さん  
Sadao Sanpei

# 学校を中心として人々をつなぎ ふるさとを心の中にもつ 子どもたちを育てたい

## 千葉県南房総市の取り組み

「千葉県の“最南端”から、“最先端”の取り組みを。南房総市では、そういう思いをもって事業にあたっています」。このように語るのは、南房総市教育委員会の三幣貞夫教育長。一連の取り組みが評価され、教育再生実行会議のメンバーに選ばれた、ただ一人の教育長です。幼・小・中・高の園長・校長を長年つとめ、子どもから大人へと成長する子どもの姿を見てきたことが、現在、同市で進めている教育事業の原点になっているという三幣教育長。小さな町の教育改革は、海と山に囲まれたなつかしい風景の中で、次第に輝きを放ちつつあります。



「将来、どこに行っても通用する学力」を向上させることを重視

南房総市は、千葉県の最南端にあり、65歳以上の人口が40%、15歳以下は9%と、少子高齢化の進んだ自治体です。交通の便など社会的・経済的基盤も弱く、県民平均所得も最低ランクに位置しています。

しかし一方で、都市部ではなくなりつとに囲まれた豊かな自然をもっています。「その特性をふまえて、子どもたちが、郷土の南房総に誇りと強い思いをもち、可能性にチャレンジする教育の推進を、6年前、私が教育長に就任してからスタートさせました（三幣教育長：以下「同じ）」

目指すのは、将来どこに行っても通用

する学力の向上と、故郷への誇りと強い思いを育てることです。そこで同市では、0歳から15歳までの15年一貫教育を打ち出しています。また、就学前保育や特別支援教育体制を充実。およそ3700人いる15歳未満の子どもたちへ、きめの細かいサポートを目指しています。

学校と塾、方向性を共有できたことでプラスの効果が生まれた

学力向上の取り組みで特徴的なのが、民間の塾との連携です。同市では、土曜スクールや夏季講座、放課後学習教室などで、周辺地域の学習塾からの講師を受け入れています。

「退職教師の再雇用も検討しましたが、塾講師は、テキスト作成のノウハウをもっています。また、実際に塾側と話をしたときに、教育に対する思い、方向性

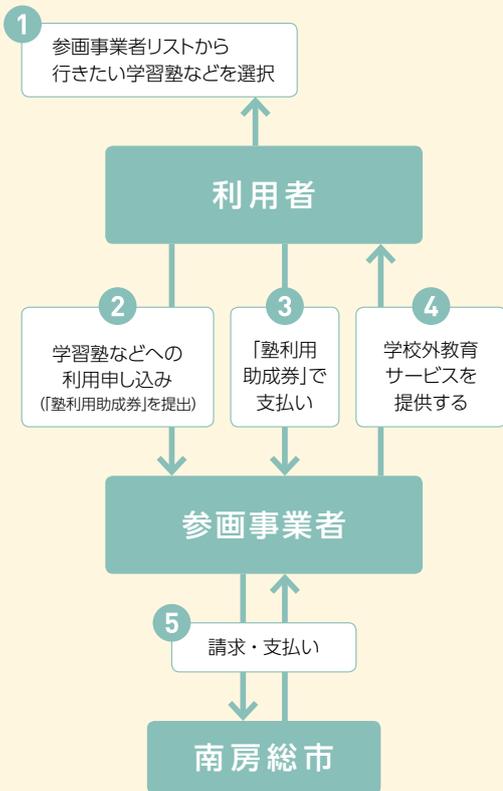
が私たちと同じだとわかり、これなら一緒にできると判断しました」

塾講師が教壇に立つということに、先生方の抵抗はなかったのでしょうか？

「初めこそ抵抗もありましたが、『先生方のことを否定するわけではない。自分がやろうという気持ちはわかるが、今の仕事量でいっぱいのところ、これ以上抱え込むのは難しい。教師の本分である授業以外の部分は外部の力を借りよう』と説明をしていきました。また、実績を積み重ねていく中で、先生の見方も少しずつ変わっていききました」

今は、教え方やカリキュラムについて、双方の話し合いも増えているそう。また、子どもたちも「授業がおもしろい」と反応が変わってきたそうです。塾と学校が同じ方向を共有できたことが、連携がうまくいったカギといえそうです。

### バウチャー交付のしくみ



\*③④の順序は参画事業者により異なる。

# 南房総市の教育

## 南房総に誇りと強い思いをもち可能性にチャレンジする教育の推進

### 1 学力向上

- 学力向上推進事業補助金
- 南房総市学力調査
- 教師塾
- 百字で伝える私の想い
- 土曜スクール
- 日本一おいしいご飯給食
- 学校図書サポート員配置
- 小学校英語活動指導者配置
- 学習講座
- 放課後学習教室
- 小学校放課後こどもクラブ
- 小学校放課後学習パウチャー交付

教育への意識・関心の高揚

### 2 教育環境の整備

- 学校統合
- 学童保育所
- 幼保一体化

新たな地域づくり

### 4 特別支援教育体制の充実

- 巡回相談員派遣
- 研修会開催
- 相談窓口設置
- 特別支援教育支援員配置(幼稚園・小中学校)
- 1歳6カ月児、3歳児、就学時健診相談

乳幼児・児童・生徒の早期からつながる支援体制

### 3 南房総学の推進

- 南房総学推進事業
- 「日本一おいしいご飯給食」の推進

地域農業(農・林・漁)の振興  
高齢者の生きがいづくり

### 5 就学前保育・教育、子育て支援の充実

- 保育所、預かり保育室
- 地域子育て支援拠点事業(ファミリーサポートセンター事業・各種相談)
- 特別支援教育支援員配置(保育所・学童保育所)
- ブックスタート・ブックステップ

学びの土台づくりと家庭サポート

子どもの成長をトータルで考える放課後学習パウチャー制度

もうひとつの大きな試みは、2015年から始まった「小学校放課後学習パウチャー制度」。家庭の所得に応じ、月1000〜7000円の利用補助(パウチャー)の交付を行うという、思い切った施策です。

「インフラが弱い同市では、習い事や塾に通うには、保護者の送り迎えが必須です。移動手段をもたない家庭や、経済的に厳しい状況の家庭は、子どもの学ぶ機会が不足しやすい状況になっていました。この制度には市内外で、61事業者、83教室が参画しています。

また、5・6年生を対象に、放課後の学校でミニバスケットや習字、そろばんなど、習い事の教室を行う『小学校放課後こどもクラブ』もスタートしています。背景には、子どものもつ力をトータルで伸ばしてあげたいという思いがあるそう。

「制度を作るだけでなく、子どもや家庭の状況に合わせて、個別に働きかけていくことも考えています」

子どもの人生を支えるのは

故郷への誇りと強い思い

加えて重視しているのが、ふるさとを学ぶ「南房総学」の推進です。

「たとえ生まれ育った土地を離れても、あるいは残っても、どこにいようと頑張れるのは、ふるさとへの強い思いがある

からこそだと私は考えます。ふるさとの記憶は、人の人生を支える大きな柱だと思っております」

第一次産業がさかんな南房総には、より実体験に近い農業・漁業体験ができるメリットがあります。例えば米作りに一から取り組む農業体験や、伝統料理に用いられるクジラの解体の見学などが行われています。給食に使われる野菜などの食材は、実際に近くの農家が収穫したものが使われているなど、まさに「地産地消」を地で行く地域です。子どもたちもそれを知っているのです、おいしいと言ってくれるそうです。

「給食の野菜で、例えば調理がしやすい、とげのないキュウリを栽培してくださいなど、地域の方の学校への思いは強いものがあります。農家の高齢化は日本共通の課題ですが、耕作放棄地となるのを防ぐためにも、ぜひいろいろな食材を生産してほしい。学校が地域と子どもをつなぐ核となり、地域を支えていける存在になることが理想です」



「地域で学ぶ 地域を学ぶ 地域が学ぶ」が南房総学のキャッチフレーズ。一環として、教育委員会では、地元の食材を栽培する農家と、給食のレシピを紹介した本も編集・発行しました。



●お話をいただいたのは  
 武雄市立武内小学校  
 校長  
**代田昭久** さん  
 Akihisa Shirota

# 地域の力と民間の力を 学校に結集させ 自立できる子どもを育てる

## 佐賀県武雄市の取り組み

「他の自治体でも、学校のカリキュラムの中に塾を入れることは、さほど難しいことではないかもしれませんが」と語る、武雄市立武内小学校の代田昭久校長。「ただ、実現できるかどうかは、改革への志が“本物”かどうかにかかっています」

2015年、公立学校という「官」の仕組みに、「民（民間の学習塾）」が融合した「官民一体型学校」をスタートさせ、一躍話題となった佐賀県武雄市。人口5万人の地方都市では、どのような取り組みが進んでいるのか、モデル校の公開授業も取材しました。

子どもが「変わる」ことで  
 先生方も納得していった

2015年度、官民一体型の教育事業を開始した武雄市。本事業の指定校のひとつである武内小学校では、「民」のパートナーである「花まる学習会」の講師が常駐し、同学習会のメソッドや教材をカリキュラムに取り入れています。

塾の教材を使った指導を始めるにあたって、先生方にどのように説明をしていったのが気になります。

「先生方には、『教師が塾のメソッドをやるなんて』という気持ちは、正直あったと思います。しかし、実際に始めてみると、子どもたちはすぐによい変化を見

せてくれました。

例えば、朝15分の『花まるタイム』。

これにより、子どもたちの間に、大きな声で返事をしたり、粘り強く取り組んだりする姿勢が見られるようになりました。よい変化を目的にすれば、先生方の納得も早い。そうなれば、あとは各自の工夫に任せるだけです（代田校長以下「内同じ」）

世の中のムードも、受け入れに影響したのではないかと校長は続けます。

「公教育は、『変わらないこと』が、あの意味よさであるともいえます。ですが、今の社会情勢のもと、教育界もさすがに少しは変わらないと、という意識が先生方の中にあつたのではないのでしょうか」

官と民の「コラボ」によって  
 速やかに意識改革が進む

学校の中に塾が入ることのプラス面は、他にもありますか？

「やはり、教師としての力量の幅や考えの深さが広がるのが大きいでしょう。先生方は、指導案やカリキュラムに沿って教えることのプロですが、学校の外で行われている実践にはなかなか触れる機会がありません。

さきの『花まるタイム』は、子どもが『わかるまで待つ』従来の学校の指導法とは違って、時間内にできない子どもも『待たない』やり方をとっています。教師はそれでいいのかと心配になりますが、

### 武雄市・官民一体型の教育

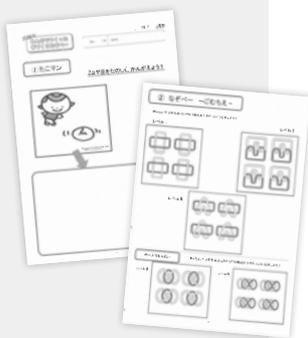
#### スマイル学習（武雄式反転授業）

●国語：2～4年生、算数：3年生以上、理科：4年生以上で実施

2014年5月から始まった取り組みで、武雄市が全ての児童にタブレット端末を配布。家庭に持ち帰り、動画による予習を終えて授業に臨む「反転学習」のスタイルをとる。

#### 花まるタイム

●2015年度からスタートしたモジュール授業。週4回、朝の15分間実施。学習塾「花まる学習会」のメソッド・教材と、小学校の既存教材を融合させ、「音読（四字熟語、古典など）」「図形パズル」「計算」「視写」を15分で全て行う。リズムに合わせた発声や動きで「発散」させ、1時間目からの授業に「集中」して向かわせること、基礎学力向上の機会を多く与えて個の力を高め、たくさん認められることで自己肯定感を高めることをねらいとしている。



▲思考力を養うオリジナル教材。2コママンガの2コマ目を創造する「たこマン」（左）と、論理性や空間認識などを養う「なぞペー」（右）。

#### 学校支援地域本部

●2014年に立ち上げられた、住民による学校の教育活動を応援する任意の団体。これまでも住民がボランティアで学校を支える活動を行ってきたが、地域本部を校内に設けることで窓口を統合。「いい学校づくりは、いいまちづくり」をモットーに、100名超の支援員が、花まるタイムのサポートその他で活動している。



▲子どもたちからの感謝の声。

## 教師の 視点から

武雄市立武内小学校  
教務主任  
江頭幸子 先生



### 塾のメソッドをやってみて 新たにわかることも多くありました

花まる学習会の前原さんのお子への接し方には、大いに刺激を受けています。朝15分の「花まるタイム」では、教える側がテンション高く、元気にやるのが大切。大きな声で明朗快活に取り組む前原さんにならぬ、教師の側も自分の殻を破って取り組んだところ、子どもたちの反応も目に見えてよくなっていきました。

また、私たち教師は、教科書に沿って教えることに慣れているため、「低学年が四字熟語を読むのは難しいのでは」など、塾の教材のカリキュラムには少し抵抗感がありました。ですが、実際にやってみるとできるもの。枠にとらわれ、できないと決めつけていた部分があったことに気づかされました。すぐに相談できる距離の近さをいかして、子どものため、今後も力を合わせていけたらいいと思っています。

## 青空教室の様子

この日は、1年生から6年生までが縦割りの班になり、体験活動を行う「青空教室」が行われました。



▲全90分の間に、2つの課題に挑戦。ひとつ目は、「数字ハンティング」。体育館にばらまかれた数字カードを使い、お題の数式を完成させます。



じっとして…

◀できた数式は、タブレット端末で撮影。操作もお手のもの。

▶お題は、「答えが6になる数式」。班のみんで発表です。



そうじゃないよ、こうやって。

▲2つ目は、武内小の今年の漢字を考えて体で表す「今年の漢字は？」。さて、思う漢字の形になっている？



◀これは「花まる」の「花」。上はきも活用しています。できた漢字は、タブレット端末で撮影し最後に体育館のスクリーンに映し出して全員で確認します。

## 塾講師の 立場から

花まる学習会  
前原匡樹 さん



### 先生方と密にコミュニケーションを取り 臨機応変に改善を図っています

学習塾と学校の大きな違いは、対象とする子どもたちの学力の幅です。一般的に、学習塾には、教育熱心な家庭の比較的学力のある子どもたちが通ってきます。一方学校では、家庭の意識も学力も幅広く、その中で、底上げを図る必要があります。

武内小では、花まる学習会が独自に開発した教材を使用していますが、実践を通して、先生方から「少しここは実態に合わない」「こうしてはどうでしょう」など、気になったことをその都度相談いただき、細かく改善を重ねています。塾のスタッフが常駐していることで、このような臨機応変な対応が可能になっています。

学校と塾、立場は違いますが、目指す方向は一緒です。子どもたちにとってよいことなら、官民を問わずに協力していけると考えています。

子どもたちは時間内いっぱい、集中してやってやろうとします。その姿を見て『そうか、こういう教育もあるのだな』と、学校の中にながら意識改革ができる。このような経験は、教師としての資質の向上につながるのではないのでしょうか」

**学校が「核」になれば  
地域を変えるエンジンになれる**

忘れてはならないのは、これらの取り組みは、地域の人たちによって支えられている部分が非常に大きいということです。

武内小学校には、常時十数名の地域住民が「支援員」として学校に入り、「花まるタイム」のサポートや子どもの見守りなど、教育活動の中に様々な形で協力しています。全国的に注目を集めていることから視察に訪れる人も多く、教職員、保護者、地域住民が一体となって地域を

もり立てていこうという意識でつながっています。そんな機運に反応して、ここ数年、他の自治体からの移住家庭も見られます。

「地域の学校に塾を入れること自体は、さほど難しくはないかもしれませんが。しかし、なぜそれをやるのか。それによって何を指すのか。様々な人を説得できるビジョンと志をもつことができれば、改革を進めるためのポイントだと思います」

青空教室の「今年の漢字」の発表では、「花まる」「夢」「世界」など、今進めている取り組みを意識したものが多く見られました。また、「武内小学校を世界一通いたい学校にしたい」という声も聞かれ、子どもたち自身が、地域づくりへの前向きな意識をもっていることがわかりました。

各地で動き始めた、公教育における民間との連携・教育の試み。まだ日が浅く、今後新たな課題が生じる可能性もあります。それらをいかに解決し、成果を上げていくか、今後の進展が注目されます。